

# 博士論文要旨

## 論文題名：2000年代以降の外食産業再編期における 飲食店の立地動向に関する研究 —京阪神大都市圏を中心に—

立命館大学大学院文学研究科  
行動文化情報学専攻博士課程後期課程  
カク ガイコウ  
郭 凱鴻

本研究は、2000年代以降の外食産業再編期の京阪神大都市圏における飲食店の立地特性変化を概観したうえで、その空間構造に対応する各事例都市での飲食店の立地特性がどこでどのように変化したのかを明らかにしたものである。

まず、2000年代以降の外食産業の再編は、零細な単独店が市場から多く淘汰されるなかで、従業者規模の大きなチェーン店が増加し続けることに特徴づけられる。筆者は、この時期での飲食店の立地特性変化は、再集中化（人口の都心回帰）の階段に位置した日本の大都市圏内における社会・経済的な変化と、主要商業集積地の分布特徴と変化、飲食店経営形態別・業種別の差異、という3つの側面からの影響を受けていることを想定した。

次に、本研究では、京阪神大都市圏とその空間構造の中心市、内郊外、外郊外に対応する大阪市、吹田市、和歌山市を対象とし、小地域である500mメッシュ統計データとNTT『タウンページ』に掲載された飲食店のポイントデータをそれぞれ用い、主要商業集積地（主要駅周辺と主要道路沿線、ショッピングセンター）と飲食店の経営形態別（チェーン店、単独店）・業種別（一般飲食店、専門料理店、軽飲食店、居酒屋等、遊興飲食店）に基づき、飲食店の立地特性変化を体系的に明らかにした。なお、このような飲食店の詳細なデータは通常の統計では表章されていないため、本研究では『タウンページ』の個店データを再度集計しなおすことによって行われた。

その結果、中心市の大阪市の都心部では、チェーン店の専門料理店と居酒屋等が大規模なSCと主要駅周辺でそれぞれ大幅に増加した。大阪市の周辺部では、チェーン店全体が増加した地域と減少した地域が混在している。そして、内郊外の吹田市では、中心地区の主要駅周辺でのチェーン店の居酒屋等が倍増し、丘陵部でのSCの新規出店とともに、チェーン店の専門料理店が増加し、学生街でのチェーン店の居酒屋等が増加傾向にある。さらに、外郊外の和歌山市では、中心部の既存の主要商業集積地でのチェーン店の一般飲食店と専門料理店が多く減少し、郊外部で新たに形成された主要商業集積地での一般飲食店と専門料理店が増加した。

最後に、本研究の結論は、まず、再集中化の階段に位置した大都市圏の社会・経済的な変化は、中心市、内郊外、外郊外によって大きく異なり、これに対応して再編現象（絶対的と相対的）に顕著な地域差があることを確認することができた。また、2000年代以降の大都市圏における主要商業集積地の変化とともに、飲食店のチェーン店の立地特性変化には、大きな差異が生じていた。さらに、特定の業種のチェーン店は、大都市圏の空間構造、あるいは主要商業集積地別にかかわらず、ターゲットとなる消費者層が集中する場所で立地する傾向があることが明らかとなった。

なお、単独店については、2000年代以降の外食産業の再編期において、少子高齢化による後継者不足や、中食産業の拡大、同業種のチェーン店による競争、経済不況により遊興飲食などへの支出の減少などが、単独店の存続に大きな影響を与えたことが考えられている。